

Title	浜松中納言物語の夢(下):その特質と構想上の役割に就いて
Sub Title	A study of 'dream' in Hamamatsu-Chunagon-Monogatari (II)
Author	池田, 利夫(Ikeda, Toshio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.84- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浜松中納言物語の夢（下）

——その特質と構想上の役割に就いて——

池田利夫

一

前号では「夢」という語を軸として展望を試みたが、本題の、浜松中納言物語の夢の内容にたち戻って考えてみたい。

現存の浜松五巻本に、十三箇所夢の記述があることは既に指摘されており、ほかに散佚した首巻に少くとも一つの夢が語られていた事は、無名草子の記事によって推定できる。即ち、十四の夢がこの作品では語られ、構想の上からも小さからぬ位置を占めているのである。まず一応、順次それを示してみよう。

(0) 散佚首巻、中納言の夢

亡父への思慕が、自然、母の許へ通う大将との折合を悪くしていたが、中納言は皮肉にもその愛娘の大君と通じ合う仲となった。彼女には既に式部卿宮という婚約者があった。その頃、唐から来朝した者の話に、亡父が唐の第三皇子に転生していると伝え聞いて、真疑はわからぬまゝ、中納言の心は異国へ傾きがちであった。ふとまどろむと、故父宮が夢に現われ、そなたの愛にひかれ、天に生れ代

る処を唐の第三皇子に転生したと告げた。目覚めた中納言は読経し明かし、間もなく、大君や母の愛を振り切つてまで渡唐した。

(無名草子、拾遺百番歌合、風葉集、内部証徴による。考証は松尾聡博士著「平安時代物語の研究」に詳しい。)

(1) 卷一、 唐后の父の大臣の夢

日本に選使として滞在中、唐土人の彼は、筑紫に流された故親王の女(吉野の尼君)との間に一女を儲けた。数年後任果て、帰国に際して娘を見捨ててもならず、又、女が渡唐した例がないのに苦慮して、「海の龍王に多くの事を申しこひける夢に」龍王が現われ、「はやく率て渡れ。これ(コノ女)はかの国(唐土)の後なれば、たひらかに渡りなん」と告げた。言葉通り一女は父と渡唐するや、美しき故に帝に召され、十六才で皇子(第三皇子)を生むと后になった。(松尾聡博士校注、日本古典文学大系本、一六一―二頁。二六七頁再述。以下引用及び頁数指摘は一切同本による)

(2) 卷一、 中納言の夢

菊の花薫る夕、唐后(河陽県の后)を垣間見て以来、中納言の心は、大君を忘れるでもないが后へ傾きがちであった。ふと、ひどく物思いに沈んだ大君が傍に居るのに驚き、忘れえぬ夜々の悲しみを訴えると、大君は涙を落し「誰により涙の海に身を沈めしをる海女(尼)となりぬと知る」と言った。涙に目覚めるとそれは夢であった。遙か大君に思いを馳せるが、別に深い意味があるとは考え及ばなかつた。(一六七頁)しかし帰国後、出迎えの中将の乳母から大君が尼になったと聞き、この夢にやつと思ひ当つた。(二二四―五頁。但、散佚首巻に、中納言の離日後大君が剃髪した記事があつた事は、他の諸資料から推して明らかである。)

(3) 卷一、 中納言の夢

垣間見以来の后への執心はおさえがたく、一の大臣への義理で五の君と過した一夜などは、中納言にとつて何の慰めにもならなかつた。ある日、靈験あらたかと聞く菩提寺に詣で再会を祈願すると、夢にこの寺の僧らしい人が現われ、「今一めよそにやはみんなこの世にはさすがに深き中のちぎりぞ」と言う。覚めて、何事か思い合わせられないでいたが、(一七五頁)やがて春の月に野に誘われた中納言は、全く偶然に物忌に来ていた后と、后とは知らずに一夜を過した。(一七五―一八〇頁)後日、后であったと知り、若君という子までなした宿縁に、今更ながら夢を思い返したのであつた。(二〇三―四頁)

(4) 卷一、中納言の夢

在唐の三年が経ち、帰国する九月になった。女王の君の計らいで若君に対面できたが、后には逢えなかった。留るも帰るもならないで悶々としていると、夜毎に故郷の母上が夢に現われ、わが子の帰国を待つ母の心が推し量られた。(二〇六頁)この頃、待ち侘びた母は、中納言が唐の王にされるという噂に、歎き苦しんでいた。(二一八頁)

(5) 卷一、河陽県の後の夢

中納言からの若君を連れて帰国したいとの申し入れに、后は思いあぐねた。愛児を手放す悲しみと、手許に置いて密通が露頭する恐れとが交錯して判断に苦しみ、泣く／＼寝入ると、「これ(若君)はこの世(唐土)の人にてあるべからず。日本ののかためなり。たゞとくわたし給へ」と夢の中で言う人がある。后は意を決して若君を中納言に託した。(二〇七―八頁。なお、若君が日本のかためになる旨の夢告はこの物語巻五までは実現せず、これを理由に続巻の存在を主張する考えもあるが認めがたい。たゞ作者の腹案として、更に書き進める構想であったとの考えは、なお考えるべきものがある。)

(6) 卷三、吉野の尼君の夢

帰国後落ち着いた中納言は、后からその母への文箱を携え、嘗て入唐した聖が住む吉野を訪れると、後の母は近くに尼君として庵を結んでいた。一方、尼君はその暁、「夢に、もろこしの後の見え給へりければ(仏ヲ念ズル)片つ方の心には(娘ノ唐后ノ身ヲ)おぼしやりつゝおこなひ暮し給ひけるに」やがて聖が後の文箱を持って訪れ、中納言とも対面して、後の消息を知った。(二六九頁)

(7) 卷三、吉野の尼君

吉野の尼君は現世にさして望みはないが、姫君(後の異風の妹)の後事を案じ、自分の後生安楽はさしおいても、それのみ三年程祈願し続けていると、尊げな僧が夢に現われ、「唐土ノ后が夜昼母ノ消息ヲ思ツテ歎キ、ソレヲ知リタイト仏ニ祈願シテイル孝養ニハ身ニシミルガ、異国デハ叶ウ管モナク、日本ノ人ニ縁ヲ結び、深イ心ヲ通ワセテ后ノ心ニコタエヨウト仏モ方便ナサツタ処、コチラデハ、姫君ノ寄辺ヲ見届ケテカラ後生ヲ析ロウト願ウノデ、コノ二ツノ願イヲ一ツニ結ビツケ、姫君ノ寄辺モコノ人(中納言)ニスルゾ」と言う。尼君はその僧を「われを助けんとて、佛の変じたまへる人にこそあんなれ」と拜した。(二八二―四頁)時に、後の消息を齎した中納

言は、姫君の面倒を約すので、尼君は夢を思い合せて仏の方便に感謝した。(二八六頁)

(8) 卷四、中納言の夢

承香殿の皇女降嫁を拝辞した中納言に世の噂や非難は集るが、気にとめず唯行い澄ましていると、「吉野の山の入道の宮の御事の、うちしきり夢に見えて、常よりもおぼつかなければ、よろづを棄て、」十月朔日吉野を急訪すると、尼君は病臥していた。修法読経に中納言は手厚くもてなしたが、半月後、姫君の後事を託すと尼君は大往生を遂げた。(三三〇～一頁)

(9) 卷四、中納言の夢

尼君没後吉野の姫君も京へ引取り、中納言は諸々女の許へ通いつゝも、唐后への恋慕はつのるばかりであった。すると、正月十余日頃から、「かうやうけんの後、つゆもまどろめば、いみじうなやみわづらひ給ふとのみ(夢ニ)見えつゝ」うなされて覚めては面影がちらついた。その後夜毎の夢は、后が病臥の姿ばかりなので、中納言の心は千々に乱れた。(三七九頁。次の夢へと続く。)

(10) 卷四、中納言の夢

后病臥の夢ばかり続くのでその身を案じている頃の三月十六日、中納言は吉野姫と月を眺め、后と一夜の契りを交したのは今宵であったと思いを深くし、琴を弾いた。夜も更けて雲行きが気掛りな寝覚に月をじっと見つめると、空にあらん限りの声がして、「かうやうけんの後、今ぞこの世の縁尽きて、天に生まれ給ひぬる」と言う。はじめは気のせいかと紛わしたが、はっきり三度も聞え、傍の若君もおびえて泣き出したので、人々も驚いて米を撒いた。中納言は法華經万部を読もうと決心した。(三七九～三八二頁)翌年、唐の宰相からの便りで、この日后が世を去ったと知り、見た夢はこれであったと悲嘆の涙に昏れた。(四三九～四四〇頁)

(11) 卷五、中納言の夢

吉野姫を誘拐された中納言の痛手は深く、姫君の佛を追って少しまどろむと、姫が息も絶えげな様子で傍に泣き崩れていた。目覚めて、姫はどこかで自分を思っているようにと胸は高鳴った。この頃、姫も式部卿宮の許で中納言を思っていた。(三九四頁。13の夢と照応)

(12) 卷五、中納言の夢

誘拐された吉野姫の行方を追って歎き暮していると、傍に唐后が垣間見た時の姿で立ち「身をかへても一つ世にあらん事のり思

す(アナタノ)心にひかれて、今しばしありぬべかりし命つきて、天にしばしありつれど、我もふかくあはれと思ひ聞えしかば、かうおほし歎くめる人(吉野ノ姫君)の御腹になんやどりぬる也。薬王品をいみじうたまちたりしかども、我も人も浅からぬあいなき思ひにひかれて、猶女の身となん生まるべき」と言つた。中納言は涙に目覚め、後の昇天の夢は事実であつたか、又、吉野の聖が姫が二十才以前に男を知らせては恐ろしいと予言したのに身籠つたのかと心は乱れた。やがて姫が宮の胤を宿した事を知つて胸を痛めるが、夢を思い合せ、嬉しくも悲しくもあつた。(四〇一―三頁、四三二頁)

四 卷五、吉野の姫君の夢

宮に誘拐された姫は、驚きと恐れと中納言恋しさに衰弱して湯水も飲めなくなった。僅かにまどろむでもなく失神しかけると、傍に中納言が居る気配がしたので、目をあけるとそこには涙に伏した宮が居た。そして再び失神状態になつた。(四〇八頁)この頃、中納言も頻りに姫の夢を見ていた。(三九四頁。11の夢と照応。)

さてこれらは、厳密に見ると、夢であるのか、幻覚、幻聴、神仏の顕現の類とすべきかに迷う点があるが、いずれも後に回想してそれを「夢」と呼んでいる。源氏物語の有名な夕顔の巻の物怪も、源氏は夢として見ているし、又目覚めても見ていて、これらの関係は微妙である。たゞ、今は夢の意味をやゝ広く解して、ともかくも夢と呼ばれるもの一切を含めて整理を加えてみよう。

二

浜松中納言物語の夢は、数が多い点の一つの特徴があるといわれるが、前号で見たように、狭衣物語にも十二例、蜻蛉日記でも十例が数えられるように、単に多いというだけでは、当時の文学の中では、さして大きな問題にならない。問題は主として、それがいかに語られ、物語の構造の中でそれがいかなる部分を占め、人がいかに夢に対応するかという点にある。そして、「夢」の語の頻度の面で、浜松と甚だ対照的な相異を見せた狭衣物語は、又、夢語りの特質に於ても際立つた懸隔を見せる。考えを進める上で、この両者を比較したいと思うので、極く簡略に狭衣物語の夢を次に示しておこう。

(一) 卷一、狭衣大将——飛鳥井姫が懷妊し、その乳母の謀により拉致される直前、狭衣は夢にそれらを見、姫の入水を暗示されるが、なすすべがない。(有明堂文庫本、八一―二頁)後、思い合わせられる事が多かった。(一〇三―四、一七七、五一八―九頁)

(二) 卷二、源氏宮——源氏宮が齊院に立つ噂もあったが、狭衣の嘆きをよそに、入内の沙汰が進行している時、源氏宮は「あやしう心えず物恐ろしきさまに、うちしきり(夢ニ)見えさせ給ふ」(一九五頁)ので、何事かと思っている。

(三) 卷三、堀川大臣——源氏宮が夢を見ていた頃、堀川邸でも「夥しきものさとし」があったので祈禱をさせていると、大臣の夢に加茂の彌吉が現われ、齊院に定まるべき人を誰がほかに召して良いものか、という強い神意を伝えた。(一九五―六頁)

(四) 卷二、帝(後一条院)——右と同じ頃、源氏宮入内を永い間待ち続けている帝の夢に「さだかに御覧する事ありて」(一九六頁)帝も驚き、占いも、源氏宮を加茂に奉らないと重大な凶と出たので、帝も大臣も不本意ながら、齊院に立てる議を決した。(一九六頁)

(四) 卷三、狭衣大将——狭衣は一品宮と結婚したがうまくいく筈もなかった。常盤で入水した飛鳥井姫が忘れられず、立派な法要を営ませたその夜、姫を偲んで語り明かして休むと、姫が夢に現われ、「暗きより暗きにまよふ死出の山とふにぞかかる光をも見る」と言った。(三三三頁)

(四) 卷三、(狭衣ノ)母宮——狭衣は、源氏宮が齊院になり、女二宮が入道したいたわしさと、一品宮との不仲に苦しんで出家を志すに至った。決行前夜、それとなく齊院に暇乞いに行くと、そこに母宮が居た。母宮は「神のこの頃夢にうちはへて見え給へば、(アナタモ)精進シテ気ヲツケナサイ」と言った。狭衣は内心ドキリとした。(三六五頁)

(四) 卷三、堀川大臣——その夜、齊院の前で狭衣が琴を弾くと、俄かに風雨が激しく襲い、神殿が高く三度鳴動し、芳香がくゆり出た。父大臣も驚いて馳けつけ、弾奏をやめさせて言った。「あやしうこの頃夢のさわがしうも静かならざりつるは、かゝる事(神意)のあるべかりければなり」(三六五―三七二頁)と。狭衣は出家後の両親の歎きを察すると忍びえなかったが、初志は曲げまいと思つた。

(四) 卷四、堀川大臣——大臣は胸騒がしい夢を頻りに見るので不審であった。加えて、神殿鳴動に驚き、漸く暁方休むと、加茂神が夢に顕現、「ひかり亡する心地こそせめ照る月の雲がくれゆくほどを知らずは(狭衣が出家スルノ)モ知ラズニ手ヲ下サナイト、目ノ前が真暗ニナロウゾ」と言う。(三七五頁)愕然として堀川院に赴くと、狭衣は今しも邸を出る所なので、取り纏って押しとどめた。母宮も急を聞

いて馳けつけ、狭衣の堅固な志も砕けた。(三七五―三八四頁)

(例) 卷四、帝——狭衣は源氏宮に似通う宰相の中將の妹を迎えたが、一品宮との仲は一層折合わず、心楽しまなかつた。都では盜賊が出没、宮中では殿上人が頻りに他界して暗い気分が覆っていた。帝も不快な日々を沈んでいると、「心得ぬさまの夢さわがしう見えさせ給へば」(四八四頁)、わが治世も終りかと退位を考えるが、思うまゝにはならない。

曰 卷四、嵯峨院——世情騒然たる中に帝は退位を決意した。次帝には嵯峨院の御子の若宮(実ハ狭衣ノ胤)が噂に高く、院も嬉しく思つた。たゞ最近、齊宮(嵯峨院女三宮)に神の諭しが頻りにあるのに悩んでいると聞き、嘆きの種に思っていると、眼前に天照大神が顕現、狭衣は唯人ではありえない宿世の持主で、第一、親を措いて若宮が帝位に即くとは何事かと叱つた。若宮を無理に即位させるなら命も尽きようとも言ひ、「このよしを夢の中にもたび／＼知らせたてまつれど、なほ心得たまはぬにや」と責めた。(四八七―八頁)驚いた院は帝や大臣にこの由を告げた。

曰 卷四、帝、堀川大臣——はからずも若君誕生の秘事(狭衣ト女二宮トノ子)が神の啓示で顕われ、讓位問題が難航している時、帝と大臣は、「疾く(狭衣ニ位ヲ)代りるさせ給はずは、悪しかりなむ」とのみうちしきり(夢ニ)御覽ずれば「今は考える余地もなく、狭衣を帝の御子にして、八月讓位と決定した。

さて、一目通覽して、浜松中納言物語の夢との隔たりは歴然としているのである。まず、夢が人を動かしている点では酷似するように見えるながら、夢を見る人の物語中での立場が異なっている。浜松では、十四の夢語り内、主人公中納言が9回(64%)見ており、あと、吉野の尼君2回、吉野姫、河陽皇后、後の父の大臣各1回となっているのに、狭衣では十二回の内逆に、主人公大將の見る夢は僅か2回(17%)に過ぎず、大部分は、堀川大臣4回、帝3回、母宮、源氏宮、嵯峨院各1回と、専ら主人公に極く近い周囲の人達によって見られているのである。

こうした分布の片寄りは、巻々における配分でも見られる。浜松では、散佚首巻に少なくとも1回のほか、巻一5回、巻二0、巻三2回、巻四、巻五各3回と、巻一に多く、巻二にそれを欠いているのが特徴で、前号で見た、夢の語の頻度の分布差と対応している。

これと反対なのが狭衣物語である。即ち、巻一1回、巻二、巻三各3回、巻四5回で、こゝでは、巻を追って夢語りが増する傾向があり、主人公の運命が次第に激しさを加えるのと対応しているかのように見える。分布や割合という形式的な偏向も、時に物語の構想の展開に密接な関係があると考えさせられる。

浜松の場合、巻一だけが在唐物語であり、主人公を廻る三人の女性、尼姫君、河陽県の後、吉野の姫君の内、唐后が登場し、中納言とはかなくも深い契りを交す巻である。これら女性群の中で、吉野姫は唐后のゆかりであり、尼姫君も、中納言の心の中で占める位置は、唐后に一步も二歩も譲るであろう。この物語の構想に就いては、稿を改めて詳論したいが、巻々に関して端的な言い方をすれば、散佚首巻は巻一の為に用意され、巻二以下は巻一の名残、もしくは後日譚とも呼ぶべき内容にとゞまっていると私は考えている。この中編物語の、巻を追って興趣を増していく事の乏しい理由の一つがこゝにあるのであろう。

これに対し狭衣では、主人公が巻末で帝位に上ろうというのである。又、夢に就いても、主人公の運命を左右する大きな夢は、主人公自身が見る事は決してなく、常に周囲に激しい形で示顕されている。これらは単に、偶々そうあるのではなく、物語の構想の初源的な段階における懸隔に由来するのではないかと思われる。

浜松も狭衣も、平安時代末期に成立した物語として、源氏物語の著しい影響を受け、各登場人物の各人に、源氏物語のそれ々の人物を指摘できる程度に、模倣も顕著である。これは夢語りという一側面に於ても例外ではない。源氏物語二十二例の夢語りを例示する紙幅がないのは残念であるが、その各帖に於ける分布と、夢を見た人物の割合だけを一瞥してみよう。巻を追って見ると、

夕顔、若菜、葵、須磨各1回、明石4回、蓬生、朝顔、玉鬘、螢各1回、若菜上2回、若菜下、横笛各1回、総角2回、浮舟3回、手習1回。

となり、点在しているようで、やはり、明石、若菜上、浮舟など、比較的波瀾の多い、物語の展開過程にある帖に目立っている。夢が構想上重大な転機になっている事がある点では、須磨、明石における、源氏召還を促す一連の夢によっても気づくであろう。次に人物の割合では、

光源氏7回(32%)のほか、明石入道、浮舟母各2回、六条御息所、朱雀帝、末摘花、夕霧、宇治中君、宇治阿闍梨、浮舟、横川僧

都の妹尼各一回

と、実に十四人にわたっている。源氏物語の登場人物の多さは、浜松、狭衣の比ではないからこれも首肯しえようし、夢語りの数十二は、作品量から見れば寧ろ少ないと言えるであろう。そして、光源氏が主人公であるのは所謂正編だけであるから、主人公の見る夢の回数是他より著しく多いと見られるが、逆に宇治十帖で、匂宮や薫君に一つもその記述がないのは好対照である。

浜松の中納言が渡唐した最大の目的は、転生した亡父に対面する為であり、それらを知せたのは夢であった、散佚首巻にそれが語られていた事は、無名草子に「式部卿宮(中納言父)もろこしの親王にむまれ給へるをつたへき、ゆめにもみて、中納言たうへわたるまではめでたし」とある記事で明らかである。伝え聞いたとは、恐らく帰朝者によってであろうが、夢が伝聞によって裏付けられたのではなく、伝え聞いただけでは半信半疑であったのが、夢を見た事によって確信を抱くに至った形なのである。遠隔の地の事実(転生もこの物語の中では事実そのものである)を夢が伝えたのであり、この種の夢は浜松では十例(0、2、4、6、8、13)を数え、他は命令を伴う予言が二例(1、5)と、単なる予言が二例である。この物語は、舞台を京都、唐土、吉野と三転させるので、瞬時に両所を結合しうるのは、まず夢を措いてはなからう。中納言は京に居ながら、亡父の唐土への転生、唐後の病臥と昇天、更に吉野姫腹への転生、又、吉野での重患を易々と知り、唐土に於ては、故郷の大君の剃髪や、中納言の帰国を待つ母の心情に触れ、一方、吉野の尼君も娘の唐后を夢に見、同じ都の内でも、違いえぬ中納言と吉野姫は互に相手を見ている。事実の伝達とは言え、そこにはたとえ幽明境を異にしても、人から人への意志や感情の流通がある。「もの思ふ人の心はあくがる」という信念がある。浜松で語られる夢の中に現われるのが、殆んど心を通わし合う愛人、親子、知り人など、現世での係累であり、龍王や僧など予言者風が出現するのは二三に留まるのが一つの特徴である。伝達も予言も知りえぬ事を知る点で共通しているが、前者が空間的な、後者が時間的な隔たりを超越する点でおのずから別の性格を持っており、その超越を現実体験させるのが夢なのである。

狭衣物語で主人公の見る夢が二例に過ぎないのは既に示したが、二例とも飛鳥井姫(一度は没後)を見ている。この姫君の話は物語の中では本筋がなく、従ってこの夢によって主人公の運命はもとより、行動に於ても転機をなさしめるに至ってはいない。そして周囲の者が見た残りの十の夢も、集約すると三つの内容になってしまう。即ち、源氏宮の入内は、彼女と堀川大臣と帝が見る三つの加茂神

託宣の夢により変更、斎院に決定されるし、主人公出家の志は、決行直前に、母宮、父大臣(二度)の夢に再度加茂神が顕現、神殿鳴動などの強い神意の示顯もあって押しとめられる。そして最後には、帝(二度)、嵯峨院、堀川大臣の三人が見る四つの夢に天照大神が現われ、狭衣は帝位に即くに至るように、かなり強引な筋立てを、夢告(託宣)に依り正当化しようとしている。この即位の事は如何に神意とは言え、無名草子の筆者も痛烈に非難しているし、作者も物語の終りの部分で「ちかき世に、かゝる例もことになきなり」とわざわざ断っているのは、非現実性に気がさしたのである。このように、同じ内容の夢を、繰り返し各人に見せるのは、浜松の夢には見られない事で、著しい相違の一つであるが、源氏の須磨明石の巻での一連の夢に通じ、いわば積上げ方式風に、動かすべからざる処置を、読者の納得を求めて定めようとするのである。

俗信が盛んであった時代であれ、夢告だけで重大事は決しかねた。蜻蛉日記の作者は、夢の如きそらごとを余り意に介さない性格であったから、石山參籠の法師が伝える、両手に日月をうけるという追従らしき夢をはじめ信じなかったが、間もなく或人がこの家に四脚門を構えた夢を見たと言うし、自分が見た、道綱が母の右足に門の文字を書いた夢を、夢解きが大臣公卿の出る兆と合わせるに及んで、夢に期待しない訳にはいかなかった。狭衣の作者が、夢や奇瑞を繰り返したのは、この人情に訴えた方法であり、目的が大きい程、一層積み重ね、大仕掛にする必要があった。浜松では、唐后や吉野厄篤の報を毎夜の夢で知ったとあるが、それは一人中納言が見るだけで、後の死を伝える天の声すら、周囲に居た者は内容を聞いていない。

この二つの物語における夢語りの、構想上に占める役割の相違は、浜松では夢が筋立てを事前に予告するか、いずれは事実として知る筈の事を前以て登場人物に知らせておくという型をとるのに、狭衣では、事後の物語の展開を理由づけようとする所にある。浜松の中納言は、見た夢を人に語っていないし、周囲の状況を、夢の論しによって打開する要因に乏しく、作者もそれを意図していなかったと思えるふしがある。登場人物は夢を直ぐ信じるが、影響する範囲はほぼ本人に留まり、信じたことによる不自然さを周囲に与えないのである。そこに夢以外の、超自然的な状況を設定する場を欠き、恰も夢によってのみ人が動かされる印象を与えるのであろう。

無名草子の論難の的である両国をかけた転生は、まことしからぬ特異な事実であるが、特異と感ずるのは夢ではなく転生の思想である。1・3・6・7の夢では神仏に祈願し、結果として夢を見ているが、源氏、狭衣にはそうした例がない。更級日記の作者は、夢

告で前世では仏師であったと聞かされ、疑わぬばかりか感謝の念に満ちているし、行成の娘の転生であるという猫の夢などと併せて、転生思想の強い孝標女の作とする一傍証と考えるのは夙に説かれる処であり、ほゞ妥当性もあらうと思うが、勿論この思想は孝標女人にとゞまらず、かなりの広がりを持つと思わねばならない。

又、浜松では夢解きが一度も行われていない。それを必要としない程夢の内容が明白だからでもあるが、狭衣のあらわな明白さとも異なり、現実と夢との交錯に於て、夢が現実を形作るのではなく、こゝでは夢自体既に現実になっているのであろう。こゝに作者の性格の発露があるのであろうか。狭衣に似通う夢をも持つ源氏物語の夢語りも、全体的には浜松に近く、両者を源氏の投影と見ると、一つの両極への分裂と解する事も出来るし、前号の「夢」の語の検討で見た結果とも共通するものである。そして作者の資性にまで引き戻して端的に言えば、浜松は夢の顕現を信じる人、狭衣は夢だけではどうにも信じきれない人と言るのであり、こゝに夢を一生の短い記録の中に幾つも書き残した人、孝標女を思い浮べ、浜松の作者の問題としても再び喚起したい処なのである。

三

物語で語られる夢は、当時の俗信、生活慣習、思潮などを示すほか、作者の手法、構想と関連を持っている事は前節で見た処であるが、日記になると、自然別の問題が起る。日記も、所謂日なみの記であれば記録であるが、更級日記のように、殆んど一生の回顧を短くまとめたような作品では、単なる記録にとゞまらず、それを執筆した時の筆者の境遇や感慨、表現の手法ともかゝり合うのであり、この夢に就いてみても、おのずから年輪が認められるようである。その年令との関係を見るためにも、極く要約して例示したい。

① 孝標女十四才——源氏を耽読している頃、夢に清けな僧が現われ「法華經五の巻をとくならへ」と言ったが、人にも語らず気にもとめず、物語に憶れ続けた。

② 十五才——物語に傾倒していると、夢に「この頃皇太后宮の一品宮の御料に六角堂に遣水をなむ作る」と言う人があり、理由を訊ねると、「天照御神を念じませ」と言つ。氣にとめず、夢解きは、帝や後の愛顧を受ける兆と合させたが、一つも実現しなかった。

③ 孝標女十五才時ノ姉——花散る頃は、先年他界した乳母や侍従大納言女を想い出す。其頃、姉が病臥し、可愛がっていた猫を下部

屋へ追い遣ると、姉の夢に「私ハ侍従大納言女デ、妹君ノ想イニ引カレテ猫ニナリ傍ニイルガ、下衆ノ中ニ置カレテ悲シイ」と泣いた。直ぐ手許に戻したが、由緒ありげな猫であった。

④ 二十六〇九才——父が常陸へ赴任中清水寺へ参籠、例の性分で祈願に身が入らない。その夜、夢で別当らしい僧が「行先のあはれならんも知らず、さもよしなしごとをのみ」とぶつ／＼言ったが、人に話すでもなく、氣にとめなかった。

⑤ 二十六〇九才の孝標女の、母に託された僧——鏡を娘代りに僧を初瀬に参籠させ、トわせる、三日目の僧の夢に清げな女が鏡を持ち、「これをみればあはれに悲しきぞ」と泣き沈んだ姿を映し、反対側には華やいた景色を映して「これを見るはうれしな」と言ったという。氣にしなかつたが、晩年思うに、悲しい姿は夫の死であり、嬉しい方は一つも実現しなかつたと同想。

⑥ 三十二才——聖でも前世は夢見ないのに、清水の礼堂で別当が「才前ノ前世ハココノ寺僧デ、仏師トシテ沢山仏ヲ造ツタ功德デ業姓ノ勝ツタ人ニ生レ代ツタ。アノ丈六仏ノ箔ヲオス途中デ死ンダ」と言う。「直ゲオシマシヨウ」と答えると、「イヤ別人ガシテ供養モ終ツタ」と言う処で目覚めた。果報な夢で、以後努めて詣でるべきであつたのにそうしなかつた。

⑦ 三十八才——結婚後空想から覚め生活も安定したので、後世を祈願に二十数年ぶりで石山に参籠すると、夢に「中堂より御香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」と言う人がある。意味はわからないが吉事であろうと行い明かした。

⑧ 三十九才——大嘗会の日に初瀬へ発ち山辺にて苦しくなり休息。読経しつゝ休むと清らかな女が「何しにおはするぞ」と問う。「いかでかは参らざらむ」と答えると「そこは、内にこそあらむとすれ。はかせの命婦をこそよく語らはめ」と言う。目覚めて嬉しく頼もしく思った。

⑨ 三十九才——長谷寺に三日参籠してまどろむと、御堂から「すは稲荷より賜はる験の杉よ」と何か投出す夢を見た。晩年夫に死別した際、稲荷に直ぐ詣でれば良かったと悔んだ。

⑩ 四十数才——明月の夜、筑紫の旧友を偲んで寝ると、二人で宮仕えした頃の夢を見た。

⑪ 四十八才——天喜三年十月十三日夜、前庭に金色の阿弥陀仏が立った。恐れ多く十分拝しえなかつたが、「さは、このたびはかへりて、のちにむかへにこむ」と言った。自分だけにしかわからない夢であつたが、夫と死別後もこの夢を頼みにした。

こゝで、年代による夢の変化の中で、結婚を境として、夢に対する作者の態度が微妙に動いている点だけを見てみよう。孝標女の結婚年次には議論もあるが、石川徹氏の（「菅原孝標女の結婚に就いて」『古代小説史稿所収』）「籠め握う」の語義の考証から、長久元年、三十三才の春という説に従えば、これを前後にして截然とした区別がある。即ち、結婚前物語を耽読し、それを夢で警告①②④⑤されても、「人にも語らず習慣はんとも思ひかけず」「人にも語らず何とも思はでやみぬる」「かくなむ見つるとも語らず心にも思ひととめでまかぬ」と、同じような表現で無関心であったと強調し、⑥の夢にも、「いかに見えけるとぞとだに耳もとどめず」と書いている。それが結婚後の⑦の夢では、内容の意味が不明であるのに「よきことならむかしと思ひて行ひ明かす」とあり、以後の夢が比較的吉夢で、それへの態度も「嬉しく頼もしくて、いよ／＼念じ奉りて⑧」「この夢ばかりぞ後の頼みとしける⑨」と、全く変化している。そして、警告に従わなかったの悪い夢ばかりが当り、吉夢は一つも実現しなかったのだ、と思ひながら、やはり後世の頼みとするのは、天喜三年の阿弥陀来迎の夢であった。たゞ、若き日の彼女が、自身言う通りの無信心であったか否かは甚だ疑問で、日記の表現によれば、物語への憧憬が強い間は夢への関心が薄く、現実が目覚めて始めて、夢への期待が強くなるというのである。ところが⑩の夢に就いても、「人にも語らず、何とも思はでやみぬる」と言いながら、後年、「天照大神を念じ奉れと見ゆる夢は、人の御乳母して、内わたりにあり、御門後の御かげにかくるべき様をのみ、夢解きも合はせしかども、その事は一つも叶はでやみぬ」と述懐しているのは矛盾であろう。人に語らず気にとめずでは決してなく、夢を常に現実とひき比べ、夢は当らぬものという経験を経ても猶、信仰の不足、精進の怠慢を省みては、それへの期待をやめなかつたのであろう。更級日記の夢には、斯くして一方に年代による変化が認められると共に、他方、一貫した不変のものゝ存在を否定できない。これは夢語りにとゞまらず、日記を通して見た彼女の生涯に於て、晩年、就中天喜三年の夢を境に宗教的回心があつたかどうかの問題にも繋がり、本質的、根元的性格、信仰に就いて言えば、そこには何等の変化もなく、脈々と続いて来たと考えられる。夢は彼女にとって信仰であった。

浜松と更級の夢に就いての先覚の論考はいくつかあり、特に浜松を中心に詳細に論じられたのは松尾聰博士（『浜松中納言物語研究』昭和六年四月）である。要点とする処は次の通りであった。

(1) 構想上夢が重大なものとして甚だ屢々用いられていること。(2) 夢が概ね印象明白条理整然現実的であり。内容から来る不気味さ

外の不気味さの全く伴っていないこと。(イ)夢以外信じ難い超自然的な事件を日記は勿論、この物語に於て全く用いていないこと。(ロ)作者が現実生活に於て殆んど絶対的に夢を信頼していた人と見られること、(ハ)夢の多くが宗教的色彩に富んでいること。(ニ)深刻な転生を説く夢が三つもあること。

又、最近も更に広く論じられた上(日本古典文学大系本)「浜松中納言物語一解説」「さて浜松の物語の作者が物語の中に用いた数々の夢が、こうした日記の夢とその性質を等しくしていると見られることは、この物語を一読する人の誰もが同意することであろうと思う」と述べられた。紙幅に乏しく、既に述べてきた小考と個々に比較しえないが、基本的には全く賛成であり、とりわけ、作者問題は、夢のほかの特に用語の面をも併せ考えて、浜松の作者は孝標女と私も思いたく、稿を改めて論じたいところである。

たゞ、夢に限定しても問題がない訳ではない。浜松孝標女作説の出発点である定家の所伝に信憑性を置くと、同一作者と伝える夜半の寢覚では、現存本に四例の夢の記述しかなく、夢の共通点の一つとして記述の多さを強く主張すると、この面で不都合が生じる。寢覚は原作に対する現存部分の割合が浜松に比べると遙か少なく、直ちに多寡を論じえない事情もないではないが、内部証徴や中村本、風葉集などからその闕巻部にあつたと思える二例(中村本には五つの夢語りがあるが、始めの三は黒川本系と共通、次の石山寺靈験の夢は竄入と思われる。結局、主として中村本から一、風葉集から一を補う)を加えてみても数は少ない。この推定分を加えた六例は、寢覚上と中納言が三回ずつ見ているが、見た夢を繰り返し回想する浜松に比べて、それらや回想の表現も寢覚は異なって感じられる。冒頭の女主人公に夢で秘曲を伝授した天人が言う「あはれ、あたし人のいたく物を思ひ、心も乱し給ふべき宿世のおはするかな」との予言は、特定の行動や筋立てを予告してではなく、寢覚上の生涯、つまり物語一篇の結構を暗示している。後年(五卷本巻四)彼女はこの夢を思い出し恨めしく思うが、人の奇しき宿世を冒頭で暗示するのに夢を以てしたのは、この場合甚だ効果的である。狭衣に見る、夢で現実を無理に打開しようというあらわさとも異なり、その限りでは浜松に近いとも考えられるが、こゝでは、登場人物が夢に期待や驚きを持ち、秘曲伝授のように直ちに現実に結びついても、夢により新しい行動を起す事に乏しい。寢覚に物怪が現われるのも、或は考える必要があるであらう。

浜松の中納言は、唐后昇天の夢告(天声)があつた明るる日から千日の精進を始めるに当り、人々に理由を「世中になほあるまじきさ

まに度々夢に見え心ばそければ(三八一頁)」と説明しており、大貳女に訪れぬ言い訳を、「此世には久しうあるまじき夢を見しに、いと心ばそくおぼえしかば(三九七頁)」としている。これは夢を人に語らないことによるばかりでなく、逆に言えば、夢見がこの物語の世界では事実と同じ権威を持っている事になる。こうした言い訳はほかの物語でも見られる事で、寢覚では、中納言が寢覚上の懐妊を知って祈禱させる理由を「夢などの慎しむべきやうに見え、心地も例ならぬを」と吹聴しているし、狭衣大将は、一度同衾しただけで女二宮に寄りつかないわけを「世の中にありはつまじき夢を見しかば、物のみ心細くて、さやうの事も思ひ絶えて」と弁解している。この、見もせぬ夢語りは時に見破られる事があった。若紫を垣間見て早速乗り込んだ若い光源氏が、「こゝに物し給ふは誰にか、尋ねまほしき夢を見給へしかば、今日なむ思ひ合はせつる」と言っても、僧都は「うちつけなる御夢語りにぞ侍るなる。」と笑うだけであった。伊勢物語では、そら夢を承知でつくも髪のお婆と同衾する話が語られている。

夢への関心の個人差は、当然ながら所詮相対的な相違に過ぎないであろう。既に見たように、現実讚美の態度を持つ清少納言にしても変な夢見は気懸りであったのであり、道綱母も夢見に心ときめかす時があったのである。夢の効験が実に屢々語られるのは仏典であり、説話の中では特に仏教説話に於てであり、それへの関心が仏心と密接に繋がっている点は見逃しえない。更級日記でもこの両者の連繋を見たが、仏教思想は浄土観の浸透の面で、短い期間にかなり著しい変化を彼等の日常生活に与えたようである。「なでふ女がまんぶみはよむ。むかしは経を読むをだに人は制しき(紫式部日記)」から、「このごろの世の人々は、十七八よりこそ、経よみ、おこなひもすれ。(更級)」へと移っている。物語を耽読しながら孝標女が夜毎に見た夢は、光源氏や薫や浮舟ではなく、抹香くゆる人々であった。又、仏教思想ばかりではなく、神道も陰陽道も俗信もあり、夢への個人差はこれらとも絡み合っているであろう。

ところが、物語の構想での位置という点になると、作者の物語の方法、技倆が重要な問題になってくる。平安末期の物語が、同じ源氏物語からの受容でありながら、夢に於てもそれ／＼の変貌をとげている事は一部指摘したが、特に源氏の夢語りを例示しえないまま、浜松、狭衣の比較に急になってしまった。この技倆の面で浜松と寢覚を比較してなお論じたいが、ひとまずこゝで擱筆したい。